

救世主と魔王の七日間

大和ソウ

- Day1 ある日私達は出会い
- Day2 互いに語り合い
- Day3 あなたに惹かれ
- Day4 真実に気づき
- Day5 それでもあなたを受け入れた
- Day6 やがて誘う深い眠りは
- Day7 ゆっくりとあなたを攫ってゆく

プロローグ

ある日突然、目を覚ますとそこは異世界だった。

異世界転生——なんてよく聞くけど、まさか私がそれを体験することになるなんて。

現世で高校生をしていたはずの私は、どうやら何かの拍子に異世界へ飛ばされてしまったらしい。

そして片田舎に住む少女、マリアとして生まれ変わった。

普通なら大混乱して帰りたいと喚くところかもしれないけど、私は冷静だった。

どちらかといえば、喜んでいたかもしれない。現世の私は居場所のない影の薄い高校生だったから。

転生後の私——マリアは村の人間から愛される少女だった。身寄りはいない。教会の手伝いをしながら暮らしていて、村人との関係は良好。転生先として申し分ない人間。

この人生なら幸せになれるかもしれない。

私はマリアとして第二の人生を歩み始めた。その矢先。

「ねえ、マリア。あなたももう十七……そろそろ、結婚を考えてみてはどう？」

シスターアンジェラは教会を取りまとめる中年の女性。いわば先輩だ。

身寄りのない私を引き取ってくれたのはアンジェラらしい。アンジェラは優しく、シスターに相應しい人だった。私もとても好きだった。

「結婚……ですか？」

十七歳。村の女性の結婚適齢期だ。だからアンジェラは勧めたんだと思う。

でも、頭の中はまだまだ高校生の私は、結婚どころか恋愛相手すらいない。

「ええ、そうよ。あなたは若い。ここで一生を終えることはないわ。結婚して、家庭で幸せを築いて欲しいの」

アンジェラはにつこり微笑む。

「この国は平和な方だけれど、近頃は悪魔被害も広がっているわ。いつ襲われるかも分からない……。ちょうどいい方がいるの。お金持ちで立派な方よ。きつとマリアをお守り下さるわ。ここにゐるよりずっといいはずよ」

——家庭の幸せ。

アンジェラの親切はありがたいと思う。でも、私はあまり気が進まなかった。

マリアとなつた身ではもう過去のことだけれど……かつての私は、家庭こそが

地獄だった。過干渉な母親に無関心な父。何かにつけて目の敵にくる妹。

あの場所には、私の幸せはカケラもなかった。

あまり覚えていないけれど、この世界に来たのも、もしかしたら私が何かしらの理由で死んだからなのかもしれない。

家庭は幸せである、なんて。私にとってはおとぎ話だ。

「……ごめんなさい、シスターアンジェラ。私は……結婚する気はありません。このまま神に仕え、一生を終えたいと思っています」

「マリア……」

「それが私の幸せなんです。申し訳ありません……」

適当な理由だったけれど、これが一番だと思った。

だけどこの世界において、私の結婚概念が尊重されることはなかった。

「シスターアンジェラ！　どういふことですか……っ。さつき外で聞きました！　」

私が隣の村のゴルダン様のご子息と結婚するって……私はお断りしたはずです！　」

慌ててアンジェラの部屋に駆け込む。アンジェラは特に慌てる様子もなく、

「ああ」、とにつこり笑みを浮かべた。

「そうなの。隣の村のゴルダン様のご子息がね、どうしてもあなたと結婚したいとおっしゃるの。ゴルダン様、お会いしたことあるでしょう？」

ゴルダン様は、隣の村で商家を営んでいる。教会にも何度か来ていたから顔も

知っている。

「でも……！ 私はこのまま教会で……」

「ゴルダン様はこの教会に援助してくださっている大切なお方よ。マリア、あなたのこともきつと大切にしてくれるわ。ね？」

——ああ、そういうこと。

援助が打ち切られると困るから、嫁に行けつてことなんだ。つまりは、そういうことだ。

やっぱり、異世界転生なんてするんじゃないかった。あのまま死ねば良かった。

私ととゴールデン様の息子の結婚話が進み始めた頃のことだった。突然村に王都からの使者が訪れた。

田舎の村だったから、王都なんて縁もなく、噂に聞くぐらいでしか知らない。

人だかりがすごくてよく見えなかったけれど、どうも騎士と司教らしき人が来ているみたいだ。

村の長がひとまず話を聞くことになったみたいで、使者の人達は長の家を招かれた。

「それにしても、突然王都から使者がくるとは……一体何事なんだろうな」

「司教様がいらしたぐらいだから、きっと重要なことなんだろう。ほら、国境のあたりで悪魔が人間を襲ったって聞いたぞ。そのことじゃないか？」

村人たちは予期せぬ訪問者に興奮しているみたいだった。

私といえば教会の仕事が減らされて、ゴルダン様のご子息に嫁ぐ準備のために、今更書き物を習ったり身綺麗にしたりしていた。

ゴルダン様のお家はとても裕福だから、みんな羨ましがっているけれど……私はちつとも嬉しくない。

部屋に籠って字を書いていた時だった。不意に、扉の外からシスターアンジェラの声がした。

「マリア！ マリアはいますか!？」

アンジェラの様子がいつもと違う。何かあったんだろーかと思ひ慌てて扉を開けた。

「シスターアンジェラ、どうしたんですか？」

「ああ、マリア。長の家まで来てちょうだい。すぐによ」

「え？」

アンジェラはやけに慌てた様子ですぐに行ってしまった。私はなんだろうと思ひながらも、長の家に向かった。

長の家……といえば、先ほど王都からの使者が来ていたはずだけど。その使者様が私に用事でもあるんだろうか？

疑問に思いながら長の家を訪ねると、先ほど人混みの中心にいた騎士と、司教様、そして長、アンジェラがいた。なんだかただならぬ雰囲気だ。

「お……遅れて申し訳ありません」

私は司教様と騎士様に向かって深くお辞儀する。

「そなたがマリアという娘か？」

司教様が尋ねる。

「はい。私がマリアでございます」

「歳はいくつだ？」

「今年で十七になりました」

「なるほど……やはり、間違いないようだな」

司教様はうんうん頷いている。私はなんのことだかさっぱり分らない。

「さて、改めて話をしようか……。この度、神殿にて神のご神託が下された。こ

の村に住むマリアという娘が、我が国を救う救世主となるというご神託だ」

「マ、マリアがですか？」

アンジェラが驚いた様子で言う。私も、村の長も驚いているようだった。

「そうだ。神はこうもおっしゃられた。救世主となった娘が、魔王を滅ぼすだろう……と」

「なんと……！」

「我々はそのことを伝えに参ったのだ。ついでには、救世主マリアは神に祈りを捧げたのち、村を出て魔王を探す旅に出よ。そしてご神託の通り、魔王を倒してまいるのだ」

「そ、そんな……っ私にはそんなこと無理です！ 刃物も握ったことないのに……！」

この人たちは何を言っているんだろうか。神の神託とはいえ、私はただの村娘。魔王を倒すなんて絶対無理だ。その神託はきつと何かの間違いだ。

「神の言葉に間違いはない。そなたは必ず魔王を倒す運命にあるのだ。長、シスター、そなたたちの力添えが必要だ。マリアが救世主としてこの村を立てるよう、協力してやってくれ」

「は、はい……っ」

話は終わり、私は一旦教会に返された。

けれど次の日には村中のそのことが知れ渡って、私はかつてないほど注目的になった。

誰も彼も、みんな私が救世主になると思っている。そして、それに期待しているみたいだった。

次の日、私は再び長の家招かれ、司教様に話を聞かされた。

悪魔と魔王、そして人間の間起こった戦いの話だ。

「そなたも、神に従うものならばある程度は知っているだろう。神と悪魔は常に対立している。長きに渡る宿怨の相手だ」

この世界には人間たちから信仰を受ける神様がいる。それと同時に、それに敵対する魔王と呼ばれる存在がいた。

魔王には配下の勢力……悪魔がいて、人間たちはいつも悪魔に頭を悩ませてきたそうだ。

片田舎の村ではあまり実感しなかったけれど、世界の各地では悪魔が人を襲ったり取り憑いたりして困らせているという話がある。

「我々もちろん、悪魔と常に戦ってきた。悪魔は人々に取り憑き、生気を奪う。中には殺戮を楽しむものもいる。悪魔……そして魔王は滅せねばならん存在だ」

司教様は難しそうな顔をして言った。

「どうにかならないものかと思っていたところに、あの神託が下ったのだ。そなたは我々の光。頼みの綱だ。救世主マリアよ、どうか魔王を滅して欲しい」

「……お話は分かりました。でも、私はほんとうになんの取り柄もないただの娘です。魔王を殺せるほどの力はありません。魔法だって使えませんし……」

「ご神託にて、神はこうもおつしやられました。魔王に魔王であることを捨てさせることが出来れば……魔王は消滅するだろう、と」

「魔王であること捨てさせる……？ それは、どういう意味でしょう」

「分かん。しかし、魔王は元々は堕天使。そして堕天使は神に仕えた天使であつた。彼らは我々とは違う、魂の置き場を変えることでその存在と姿が変わっていくそう。つまりは、魔王の魂を揺さぶる何か、そなたにはあるということ」

「……よく、分かりません」

「マリアよ、彼らは魂でその存在を保っている。つまりは、心の在り方が生き方を変えるのだ。求めれば天使にも、悪魔にもなる。しかしどちらも望まねば……神はそうおっしゃるのだ」

私も一応は教会で働いている身分だから、この世界において神様の言葉がどれほど重要かよくわかっていゝつもりだ。多分、私が無理だと言つても長は私を村から放りだすだろうし、無理矢理結婚を勧めていたアンジェラも救世主になりなさいというだろう。それぐらい強い力を持っている。

——結局、言われるまま。私の存在なんて、この世界にとって都合のいいお人形じゃない。

世界とか救世主とか、もうどうでもいい。

優しい人ヅラをして手のひらを返したような態度ばかりするアンジェラも、勝手な大人の都合で私を振り回す村の人達も、神様だかなんだか知らない臃げな存在に従ってる司教様も、みんなみんな信じられなかった。

だから私は村を出ることにした。

教会で七日七晩祈りを捧げた後、私は住んでいた村を出た。

目的は、悪魔達を束ねている魔王を倒すこと。

こんな私にそんな力があるのかは分からないけど、今はとにかく村から離れたかった。

幸い、旅で使うお金は神殿が負担してくれたし、旅に持っていく荷物も村が用意してくれた。このまま延々と放浪の旅もいいかななんて思った。

けれど、どこの村へ行っても私は「救世主様」として丁重に扱われた。かけられる期待と賞賛の言葉は、片田舎で育った私にはとても重いものだった。

皆が言うように魔王を倒せばいい。だけど、未だに私はそれを信じて出
来ないでいる。

毎日ただ教会で祈りながら過ごしていた私に、一体どうやって魔王を倒せつて
いうの？

『ご神託にて、神はこうもおつしやられました。魔王に魔王であることを捨てさせ
ることが出来れば……魔王は消滅するだろう、と』

司教様はそんなふうに言っていたけど、正直意味が分からない。あやふやなご神
託だ。こんな小娘に魔王が倒せると、本気で思っているのだろうか。

Day 1

私は村や町を点々としながら歩いた。なにせ、魔王がどこにいるのかも分からない。というか、魔王つて普通魔界とか、地下とかにいるものなんじゃないかと思うんだけど……その辺りのアドバイスは全然もらえなかったから、とにかく自分の足で探すしかなかった。

旅を続けていたある日のことだった。

立ち寄った丘の向こうに立つ一本の樹の下に、何かが見えた。近付くと、漆黒の翼を持った青年がいた。

金髪の青年はそこで昼寝をしているみたいだった。草の上に寝転がって気持ちよさそうに眠っている。

でも、私はのんびり観察するのをやめて、ハッとした。

黒い翼は悪魔の証――。

実際に見たのは初めてだ。旅立つ前、司教様に散々説明されたから覚えている。多分、この人は悪魔だ。

悪魔は人を襲い、弱みに付け込んで騙す魔王の手先。闇を好み、闇の中でのみ生きられる。人間の魂を墮落させる存在。

でも、私はどちらかといえばこの青年を見て、恐怖よりも美しさに魅入っていた。

ずっと見ていたくなるほど綺麗な顔立ちだ。漆黒の翼に漆黒の衣。羽の色はともかくとして、天使に見えなくもない。

——でも、私別に悪魔を倒す方法知らないし、なんだったら武器も持ってないし……。この人と戦闘になっても、何もできないんだよね。

私の目的は魔王なんだし、悪魔一匹ぐらい別にいいか。お昼寝してるだけみたいだし。

黙って立ち去ろうとした時だった。

「待てよ」

後ろから突然声をかけられる。ゆつくりと振り向くと、青年がこちらを見て体を起こしていた。

「お前、人間だろ？」

身構えようとしていた私に、青年はニヤツとした笑みを向ける。

「……はい。あなたは悪魔……ですよね」

「見れば分かるだろ」

「どうしてこんなところにいるんですか……？」

「昼寝してたんだよ。ここは日当たりがいいからな」

そう言った彼に、思わず笑ってしまう。悪魔は暗いところを好むと聞いたけど、彼は違うらしい。

彼は敵対心がないのか、私に対して攻撃しようとするそぶりは見せなかった。

「お前はなんでここにいるんだ？　こんな所なんにもないだろ」

「私は――」

本当のことなんか言ったら彼は私を攻撃するだろうか。この屈託のない笑顔が憎しみに歪むだろうか。

そうは思えない。彼は……そんな悪魔じゃない。なぜだかそう思えて、私は本当のことを口にした。

「私、救世主なんです」

そう言った私に、彼は面白そうに視線をぶつけてジロジロと眺めた。

「へえ、お前みたいなのが？」

「そう、言われたんです」

「ハッ……人選ミスだな。どうやってその細腕で戦うっていうんだ」

「私にだって分かりません。けど司教様がそうおっしゃるから……多分、そうなんだと思います」

「それで、今は魔王探して放浪の旅つてどこか」

「はい」

彼はまた草の上にゴロンと横になって、頭の上で手を組んだ。

空を見つめる瞳は青く澄んでいて、まるでその空を映したように綺麗な目をしている。

悪魔なら魔王のことも知っているはず。救世主は敵。

なのに、彼はそれを知っても攻撃どころか何もしようとしない。悪魔はもつと攻撃的で狡猾な生き物だって聞いたけど……彼は悪魔じゃないの？

っていうか悪魔がこんな丘でお昼寝って。普通暗闇の中に潜んでいるものだと思うけど……。

「あなたは悪魔なのに、こんなところにもいいんですか？」

「俺は勝手にやつてるからいいんだよ」

なんて自由なんだろう。魔界は意外とホワイトなのかもしれない。そんなに自由なら、私も悪魔になればよかった。

「悪魔も案外自由なんですネ」

「俺は特別なんだ」

そう言う彼の表情はどこか寂しそうに陰る。

彼も私のように、何かに選ばれた立場なのだろうか。それとも何か辛いことでもあったのだろうか。

あまりにも無防備な彼の隣に、私は何も考えずに腰を下ろして同じように寝転んだ。

「……たまにはこんな風にのんびりするのもいいですね」

思えば……転生する前も、してからも、誰かに何かに振り回されてばかりだった。

転生してからは幸せになれると思ったけど、親切だと思っていたシスターアンジェラは教会のために私を知らない男性に嫁がせようとしたし、村の長は私の意見も聞かず司教様のいいなり。結局、無理やり決められた結婚話も無くなった。

みんな勝手だ。私の意見なんて聞いてない。

雲が流れている様を見ながら、その大きさや形を何かに例えてみたり。どうしても

いいことを考えたりする時間が最近はなかったように思う。

悪魔の隣でのんびりしているなんて不思議だ。

「いい場所だろ」

「はい……空も綺麗で、空気も澄んでいて、いい景色ですね」

「ルシウス」

「え？」

「俺の名前だ」

「ルシウス……私は、マリアです」

「マリアか。覚えといてやるよ」

あまりにも澄んだ瞳をした悪魔は私に向けて屈託のない笑みを返した。

Day 2

私はその丘に近い村に留まることにした。

次の場所に行くこともできたけど……なんだかルシウスのことが気になった。

丘に行くと、ルシウスはまだいた。昨日と同じで、丘に寝転んでいる。

「ルシウス」

声を掛けると、ぱちつと目が開く。真っ青な瞳は太陽に照らされて綺麗な宝石みたいにキラキラしている。

「今日も来たのか？」

「ルシウスに会おうと思って」

そういうと、ルシウスはびつくりしたような顔をした。やがて、笑った。

「そうだな。俺もお前のことは気になってたんだ。座れよ」

どうやら邪険にはされていないみたい。言われるまま、私はルシウスの横に座った。

「もしかして、あれからずっと寝てたんですか？」

「そんなわけないだろ。夜になったら魔界に帰る」

魔界——それってもしかして、悪魔達がいる場所のことだろうか。そこに行けば魔王がいるかもしれない。

「……一人だとならなくなりませんか？」

「そうでもねえよ」

「じゃあ、何をするんですか？」

「昼寝」

「お昼寝もいいですけど、寝てばかりだと牛になりますよ」

「ならねーよ俺は悪魔だぞ」

ルシウスは悪魔だ。悪魔だけれど、話すと楽しかった。昼寝をすると言いながらも、話しかければ答えてくれる。人間に興味があるのか、話すと色々質問してきた。

私の冗談をルシウスが笑い、ルシウスの冗談に私が怒る。他愛ないやりとりだったけど、楽しい時間だった。

ルシウスは自分がある世界のことを話してくれた。悪魔たちが暮らす世界——
——魔界のこと。私も自分が住んでいた村のことを話した。

大概愚痴ばかりが零れたけど、住む世界が違うことなのに、気が合うから不思議だった。

お互いそれについてああだこうだと言って意見を交わし、眠くなったら二人で横になって昼寝をした。

押し付けられた使命を持った私にとっては、意味のないその時間は何者にも縛られないかけがえのない時間だった。

「……ルシウスは、悪魔なのに人間を殺したりはしないんですか？」

私の質問に、ルシウスは訝しげな表情を浮かべた。質問が直球すぎたのだろうか。

ルシウスの雰囲気ならなんとなく答えてくれそうな気がしたんだけど……。

「面白くねえことはしねえ」

「そうですか……」

「言っておくがな、ああいうことをするのは下っ端の暇な奴だけだ。悪魔が全員人間を殺すわけじゃない」

「でも、悪魔は人間を襲って生きてるって聞きましたけど……」

「食うかよ。まあ中にはそういう連中もいるのは確かだが……悪魔は人間とは違う。食事がなくても生きていける。糧は必要^かだけどな」

「糧？」

「俺達は天使とは違って人間の負の感情や欲を喰らう。無闇に人間を殺したりはしない」

「どうやらルシウスは人間を嫌ってはいないらしい。だからこそ私と普通に話もするのだろう。」

司教様から悪魔について色々聞いたけど……思っていたのと全然違う。ルシウスの言う通り中には残虐な悪魔もいるのかもしれないけど……。

こんないい悪魔もいるなら、私は全然友達になれそうだ。

「俺は嫌いなんだよ。あんなジメツとした所で一日中過ごして……どいつもこいつもへこへこしやがって。そのくせ責任ばかり押し付けてきやがる」

私と同じだ——。

救世主になった途端みんな崇めはじめたけれど、都合のいい責任転嫁だと思った。怖いことはみんな私に任せればいい。困ったことはみんな救世主様が解決してくれる……。都合のいいことばかり言う人達。

そう思うと転生前も転生した後も変わらない。救世主になったのに、私の立場は以前と何も変わっていない。

「ルシウスは……家族やお友達はいないんですか？」

「悪魔にそんなもんいねえよ」

「ちょっと、寂しいですね」

「まあでも、お前と知り合ったから友達は一人増えたな？」

ルシウスは友達。会ったばかりだし、悪魔だけど、なぜだかそう思った。

この世界に来て、人と話して……それなりに知り合いもいたし、友達もいたはずだったけど、みんな私が救世主になると変わってしまった。

ずっとずっと変わらない人なんていないのかもしれないけど……。

不思議だ。ルシウスの言葉は信じられる。私が救世主だって知ってるくせに全然怖がらないからだろうか。悪魔は人を騙すと教わったけれど、ルシウスは嘘をつかない。なぜだかそう思えた。

一日中語り合った。ルシウスは夕暮れとともに魔界へ帰ってしまうから、私とはそれまでしかいられなかった。

日没になる瞬間まで、私達はお互いのことを話し続けた。

寝っ転がっていたルシウスがようやく腰を上げる。黒い翼をばさりと広げた。

「じゃあな」

「はい」

「明日も来るのか？」

明日――。

私は救世主。世界を救うため、魔王を倒す旅に出なければならない。だけ

ど……。

「はい。明日も来ます」

私は深く考えず頷いた。

ルシウスは薄ら笑みを浮かべると、大空に羽ばたいて行つた。その姿を眺めながら私は考えた。

——どうして、明日も来るなんて言ってしまったんだろう。私にはお役目があるのに。魔王を倒さなきゃならないのに。

でも心のどこかで考えている。『このままどこか遠くに逃げてしまいたい』つて。

だって魔王を倒す方法なんて分からないし、戦ったことなんてないし。

私こそ、『救世主であることを捨ててしまいたい』。

Day 3

翌日、私は村で買ったパンと果物を持って丘に向かった。ルシウスも食べるか分からないけど、一応二人分。

日がすっかり高くなっているから、きっと来ているはず。思った通り、ルシウスは昨日と同じ場所に寝っ転がっていた。

「ルシウス」

私が現れると、ルシウスは体を起こした。

「やっと来たか」

「もしかして、待っていました？」

「待ってねえよ。昼寝してたんだ」

本当にそうだろうか。なんだか言い訳みたいに聞こえて、つい可笑しくなってしまう。

「ルシウスはご飯食べましたか？ 村で色々買ってきたんです」

私はカゴの中に入った食べ物を見せた。ルシウスはあまり興味なさそうだ。

「人間の食い物は食ったことがねえな」

「そうですよね……」

そもそも、悪魔は人間の感情や欲を喰らうって昨日聞いたばかりなのに。余計なお節介を焼いてしまった。

「ま、食つても死なねえから一つもらつてやる」

そう言つてカゴの中に入つた果物を一つ手に取るとそのままかじつた。

「何だこれ!? 苦いじゃねえか」

「ルシウス、それは皮を剥いて食べるんですよ」

「……早く言えよ」

「すぐに食べようとするからですよ」

私は笑いを堪えてルシウスが一口齧つた果物を受け取ると、ナイフで丁寧に皮を剥いた。悪魔にも味覚があるらしい。案外、人間と似ているのかもしれない。

「はい、どうぞ」

実だけ取り出した果物をルシウスに手渡す。ルシウスは受け取るなり一口で食べてしまった。

「ふーん……まあ、食えないことはないな」

「この国の名産なんですよ。この近くにも畑がたくさんあるんです」

「お前も好きなのか？」

「そうですね、好きですよ」

「貸せよ。俺がやってやる」

ルシウスが手を差し出す。俺が剥いてやるってことだろうか。私は戸惑ったけど、ナイフと果物を差し出した。

ルシウスはスルスルと皮を剥いていく。私よりも手慣れていた。あつという間に剥いてしまうと、それを私に差し出した。

「どうだ」

なんだか自慢げな顔を見ると、少し腹が立つ。

「上手ですね。……私よりも」

私は切ったばかりの果物を手に取り、口の中に放り込む。無駄のない切り口。皮は最低限のところで切つてある。とても今日初めてナイフを握ったとは思えない。

「ルシウスは普段料理とかするんですか？」

「するわけねえだろ。お前のを見て切つたんだよ」

「見様見真似ですごいですね」

ルシウスは悪魔だけど人間的だ。喜怒哀楽があつて、しっかり意思表示する。

ルシウスみたいな悪魔ばかりなら、人間もきつと仲良くなれたかもしれないのに。

「ルシウスは……どうして悪魔になつたんですか？」

「なんだ、突然」

「ちよつと、気になつて」

考えてもみれば、私達は悪魔がどんなふうになつて、どんなふうになつてい

るかあまり知らない。私たちが知る悪魔は、教会で伝えられる中にしかない。人伝

に聞いた話を鵜呑みにして、悪魔はこういうものなんだと思ひ込んでいた。

「もう随分前の話だ。元いた場所に嫌気が差してな。飛び出したらいつの間にか悪魔にされてたんだよ」

「もしかして……家出？」

「まあ、そんなもんだ。口うるさい連中ばかりいるところで、ああしろこうろ……天使とはなんたるべきか……面倒な戒律ばかりだった」

「天使？」

「大昔の話だ」

じゃあ、もしかしてルシウスは元は天使だったの？ それで悪魔になったってこ

とは——墮天使？

一番初めに魔界に降り立った墮天使が悪魔になったって話は聞いたことがある。もしかして、ルシウスがその墮天使なのだろうか。

「けど、天界も魔界も戒律が多いのは一緒だった。結局同じだ。俺は面倒な役目を押し付けられて、下っ端連中の尻拭いばかりだ」

「……っ私もなんです!」

なんだか仲間を見つけたみたいない気持ちになって、つい大声になった。

ルシウスがどんな環境にいるか分からないけど、私も意味の分からない勝手な押し付けのせいでここにいる。だからルシウスの気持ちななんとなく分かる。

「あ……ごめんなさい。突然……」

「……救世主って言ったな。その前は何をしてたんだ」

「普通の村娘ですよ。私は身寄りがいなくて、村の教会にお世話になっていまし

た。そこにいたシスターがずっと優しくしてくれていたんですけど、ある日私の結婚を勝手に決めてしまつて……そうしたら、突然王都から使者が来て、救世主だなんて言われて……気が付いたら旅に出ることになっていました」

「クソ野郎ばっかだな」

「そうなんです！ クソ野郎——あ、いや。えっと……」

ルシウスがふつと笑う。馬鹿にしているとかそういうんじゃないくて、もつと優しい笑顔だ。

「人間も色々大変だな」

「悪魔も色々大変なんですね」

「ここはいいな。面倒なこともねえし、寝てれば時間が過ぎる」

「はい……そうですね」

二人で一緒にゴロンと横になる。風が気持ちいい。草が顔に当たって少しくすぐつたい。ルシウスは……目を瞑っているけど、起きているみたいだ。かと思つたら、犬みたいに大きな欠伸をした。

「眠いんですか？」

「別に。なんとなくだ」

「悪魔も眠くなるんですね」

「さあな。お前がいるからかな」

ぱちつと開いた目が私の方を見る。青空みたいな瞳が私を見つめて、なんだかドキドキしてしまう。

「わ……私がいると退屈って意味ですか？」

「違う」

「じゃあ、どういう意味です？」

「……落ち着くって意味だよ。いちいち聞くな。落ち着かなくなるだろ」

「な……っ」

ルシウスはどういうつもりでそんなことを言うんだろう。まさか、私を誘惑してる？ そんなふうには見えないけど……。

目を瞑っているけど、口はへの字に曲がっている。なんだか、ふて寝しているみたいだ。それとも、照れているんだろうか。

でも、なんだか嬉しい。ルシウスにとって、私は落ち着ける人間なんだ。

そして多分、私にとってのルシウスもそんな存在だ。まだ出会ったばかりだけど、そう思える。

「……私も、ルシウスといると落ち着きます」

言ったそばから目を瞑って、寝ているふりをしてみた。

ルシウスは黙ったままだ。でも、寝息は聞こえてこない。多分、起きている。

また照れてるのかな。多分そうだ。

なんだか幸せな気分だった。私は初めて出会った悪魔に対して、好意を感じていることに気が付いた。おかしいことだって分かっているけど……。

ルシウスもそうだったらしいのにな。

でも、悪魔が毎日のようにこんなところに来てお昼寝なんて変わっている。

ルシウスはどんなことをしているんだろう。さっきの話だと、元々天界にいて、それから悪魔になったみたいだ。それから何かの立場を与えられたみたいだけ
ど……。

不意に、私の頭にある考えがよぎった。もしかして、ルシウスは……。

ううん、きっと考え過ぎた。こんなところにいるわけがない。私と仲良くおしゃべりするわけがない。きっと、勘違いだ。